

法学部の新設を祝いつ惟う

学 長 原 田 俊 夫

1992年4月に小山市を貫流する思川沿いにある白鷗キャンパスに白鷗大学法学部が新設され、10倍を超える厳しい入学試験の競争率を経て、189名の新1年度生を迎え入れることができ、彼等が、在来の1,700名に近い経営学部学生および女子短期大学の1,300余名の学生とともに、若い可能性の実現と新たな希望に燃えて研学の道を共に辿るに至ったことは、このキャンパスに関係する教職員をはじめとする各分野における諸賢とともに、真にご同慶の至りである。

この期待と、誇りに満ちた日を迎えることができたのは、白鷗大学だけの喜びに止まるものではない。小山市に、更に文化の明るい灯をともし、栃木県をはじめとする極めて広い地域社会に、光を与える核が生じたことにもなるからである。しかし、これが可能となったのは、やはり、栃木県民、小山市をはじめとする周辺地域の方々の、教育に対する深いご理解、ご助言とご協力があったからであり、教職員をはじめとする白鷗関係者の懸命な努力と様々な犠牲もあったからである。更にしていうなら、それらの起動力の中心となった故上岡一嘉前学長の教育を通じての社会奉仕への広大な構想力と、強い実行力があったからである。

1986年に開学した4年制の白鷗大学経営学部が、1974年創立の白鷗女子短期大学と共に着々として名声をあげていった実績の積み重ねが、今日の喜びを生み出した貴重な原動力となったともいえよう。

文部省と直接折衝にあたってからだけでも2年間、様々な紆余曲折を経な

がら1991年12月に法学部設置の正式認可を得ることができたのは、すべて上述の諸事情によるといえよう。慶びを祝うとともに、これらの人々に心から感謝の念を強く抱くものである。とともに、新設の白鷗大学法学部を既設の経営学部や女子短期大学とともに如何に運営し、共栄の道を計ってゆかなければならないかの方針設定を考えると、まさに身の締まる思いを禁じ得ないのである。

すでに白鷗キャンパス全体のコンセンサスとして十分に認識されている、語学の尊重、国際化時代と複雑な国内社会の動向に如何に対応してゆくかに備え、法学部でも、国際コースと一般コースを設け、前者では、国際関係法の知識と応用力を身につける為、基礎的な科目に加え、他大学では必ずしもそこまでは進めていないアジア法やイラン法の各分野などを、従来の英米法等に加えて勉強するチャンスを与え、後者では、基礎科目に加え、企業会計法、証券取引法、知的所有権処理関係の各法、あるいは、環境法、社会保障法、地方行政法など、他大学の法学部に対し、これまた、劣ることのないよう、法学部の教授陣は万全の措置を講じている。しかしながら、昨今の国の内外を問わぬ政治・経済・文化・社会等の巨大なうねりの中であって、如何にこれらに対応できる語学教育を進め、あるいは、異文化をも積極的に受け入れ、固有の文化との協調を計るかとか、苛烈な競争社会、利害相剋の激しい中で、如何に順法精神を貫き、しかも繁栄への道を模索し、積極的にそれに取り込んでゆく若い人材を育成してゆくべきかの教育の本道に立ち入ってみると、設立の多難さ以上に、継続的運営展開の困難さを痛切に感じるのである。

この場合、大都会の大規模大学の運営方法を十分に学び取り、検討することは大切だが、そこで時々見かける講義オンリーの一方的なマス・エデュケーション方式を真似るだけでは、大都市に近い地方の有力中核大学としての特色を麻痺させてしまうことになろう。また、それへのコースは十分に考えては置くべきだろうが、高級官僚への道、各種の資格習得、法務面でのプロフェッショナルズや研究者養成のみに重点を置く教育体制は、基本的には疑問とい

わざるを得ないとも思う。全体的な流れからいえば、近代感覚と創造力に恵まれ、順法精神に富み、リーガル・マインドを十分に備え、常識と公正な判断力を持ち、個性豊かで、しかも自らの努力と責任のもとに、積極性と冒険心に満ちた若い人材を養成し、様々な地域社会での発展の推進役あるいは原動力となり、また、情勢によっては、進んで国際社会にも進出し、異文化にも前向きに融け込み、あるいは異文化を積極的に受け入れながら、その置かれた立場において献身的な努力を積み重ねてゆける「心」を養うことが、専門および一般科目系列の勉強に加え、極めて重要な課題になり得ると思惟するのである。と同時に、教員諸賢におかれては、専門分野での本格的究明を深められるとともに、県・市民の為の法律相談、講演会講師、研修生の引き受け等を通じ、また、職員各位におかれては、教員・学生とも一体化して、社会への奉仕と、社会との共栄の道を切り開いていただけることを強く切望する次第である。